

それは風の強い、年の瀬のある晴れた日だった。神谷美恵子先生の展示を閲覧するために、長島愛生園を訪れた。歴史館の前に広がる、瀬戸内海は青く美しかった。同じ海を、神谷先生も見ていたのだろうか？「神谷美恵子」、「長島愛生園」、そして「癩（ハンセン病）」の3つが織りなしたいくつかの偶然が、私の意識を長島愛生園に向けさせ、学生のころから漠然としていた「生きがい」という言葉の意味を、社会人になった今の私に再考する機会を与えてくれた。気付けば、神谷先生が愛生園での診療の中で、どのように「生きがい」という言葉の深淵を探っていたのかに思いを馳せながら、旅行鞆に詰めていた「生きがいについて」を、帰りの列車の中でひもといていた。

偶然その1…「生きがいについて」を介した、神谷先生との出会い

自分が学生時代、たまたま大学近くの本屋で、友人が立ち読みしていた本を手にとった。それが、「生きがいについて」であり、神谷先生との最初の出会いであった。その友人がなぜ、その本を読んでいたのかは知らないが、題名に惹かれて、そのまま読んでいる自分がそこにいた。

その時の読後感は、精神科医である神谷先生が、長島愛生園という国立の癩の療養施設での臨床経験を切り口に、「生きがい」の多彩な側面を詳らかにしているという印象であった。そして、「生きがい」とは、自分の能力や才能を育て、人生をかけて自分のやりたいことをすればいいのかと、その当時の私は考えていた。ただ、一方で本当にこの解釈でいいのかという疑問もくすぶっていた。

偶然その2…「白描」の衝撃

「癩は天刑である」の一節から始まる「白描」は、癩で天逝した詩人、明石海人が紡いだ魂の詩歌である。

「人の世を脱れて人の世を知り、骨肉と離れて愛を信じ、明を失っては内にひらく青山白雲をも見た。」この言葉に思わず、胸が締め付けられるような迫力を感じた。そして、「癩はまた天啓でもあった。」という言葉に、目の覚めるような衝撃を受けた。癩（ハンセン病）により、社会から隔離され、愛する家族と別れさせられ、しかも眼の光さえも失ってしまった彼は、それでも、それを「天啓」という。私は眼科医でもあり、眼疾で失明した患者を幾人も診てきたが、ほとんどが悲嘆にくれるばかりで、彼のように運命を神々しいまでに受け入れた人間を知らない。何が、彼のこのような心の変革を起させたのか？

偶然その3…神谷先生と、明石海人、そして長島愛生園

明石海人が長島愛生園で詩作活動をしていたことを知ったとき、私の脳裏に

なにかがよぎった。神谷先生、明石海人、長島愛生園という言葉が私の中で連鎖反応の如くつながった時、私は、明石海人の心の変革や、神谷先生がなぜ「生きがいについて」を書かれたのか、その本当の理由がわかったような気がした。この著書の出発点は、明石海人のように、自分の才能を育んだり、好きな道を進むことが許されない絶望的な状況で、なお「生きがい」を見つけて生きていくとする、癩（ハンセン病）者との心の交流だ。そして、神谷先生が見出した「生きがい」に関する一つの見解は、偏見や病と闘い続け、或は闘いに敗れていった者たちの苦しみから生まれる、不思議に消えることのない確かな光、心の闇に射し込む優しい光のようなものではなかったか。

最後に…神谷先生の説く「生きがい」が、我々現代人に問いかけるもの

神谷先生は、自身の経験から

「なぜ私たちがなくあなたが？

あなたは代って下さったのだ。

代って人としてあらゆるものを奪われ、

地獄の責苦を悩みぬいてくださった」癩（ハンセン病）者の苦しみと悲しみの体験から生まれる、人間の生命や人格そのものから湧き出てくる、生きとし生けるものとの心を通わせる喜び、ものの本質を探り、考え、学び理解する喜び、自らの生命を注ぎだして新しい形やイメージを作り出す喜びが、「生きがい」ではないかと説く。

ともすれば、時代や文化の急速な変化に翻弄され、「生きがい」の重要な要素である心の感受性や、物事をありのままに受け入れる心の余裕や、本質を見抜く洞察力などが損なわれがちな現代において、この神谷先生の深い洞察に満ちた「生きがい」に関する考え方は、時代を超えて、我々現代人にも通用し、かつ心しておかなければならないのではないだろうか？